

THE DEEP BLUE

(紺碧の海にビルフィッシュを追う)

湾内の航路をゆるゆると進んだボートは、湾口を抜けるとフルスロットルに加速した。「キーン。」というジェット機にも似たエンジン音を轟かせ、一気に 25 ノット超まで加速すると、後ろに見える（松尾芭蕉）的な島々はあつと言う間に小さくなっていった。この景色とは不釣り合いのアメリカンボート。しかし一旦バウ側に目を向ければ、正反対に、それはハワイ、コナ沖に向かうビルフィッシュクレイジーのようにも見えてくる。（ドタン、バタン）ではなく、（ズシン、ズシン）と波を切るビッグボート。正に今日は（大船に乗ったつもりで・・・）である。

この日の私は、キャプテン N さんのご厚意で、BOL 北日本ビルフィッシュトーナメント 第 2 戦に参戦するボート（BON-BON-BLANCO）に乗船させて頂いた。母港、塩釜の要害港からの出港である。私自身かつて幾度となく夢を追い、この港に通い詰めた日々が懐かしい。震災による被害は少なかったのか、かつてのまま、のようにも見える。ボートは CABO35ft. 450 HP×2 基のエンジンを持ち、ツナタワー、ロケットランチャー、チークのファイティングチェアで武装したこのボートは、芸能人御用達の、いわゆる（超高級お茶飲み船）とは一線を画す、戦艦なのである。この怪物マシンに、メインタックルはアルテクノスの 50ポンドを 5セット、サブにペンの 80ポンドを 3セットを搭載、出港前に入念に 7kg にドラッグ設定を行っておく。さらにボートには GPS 魚探、360° ソナーはもちろん、鳥山レーダーまで付いていると言うから驚きである。（遊び）ではなく（本気）なのだ。

本日のメンバーは私の他、キャプテンの N さん、ベテランクルーの S さんと S さんの 4 名。キャプテンとは二十数年前に御一緒させて頂いて以来である。この方、元グルーパーボーイズ所属の凄腕アングラで、国内外の大物釣りに精通し、特に GT フィッシングにおいては私の知る限り福島県では No.1 だと思う（クレイジーさで、失礼）。カジキ釣りに関してもこのエリアでの黎明期から試行錯誤しながら行っており、キャリアも長い。以前からカジキ釣りの話だけは聞いていたが、こうして誘って頂き、大変光栄に思っている。

ボートは一路、N38° 00' E142° 00' の実績海域に向かって直進する。カツオ船の操業海域でもあるこのエリアまで、要害から 60 マイルの彼方だ。この高速戦艦をもっても 2 時間半の航程。移動中、S さんはタックルの準備に余念がない。30 cm 超の、グリーンのスカーートを履いた巨大なルアーにリーダーとフックを付ける。見たことも無い太いリーダーにフックを付け、ルアーにセットする。この場合、ノットでは無くスリーブによるカシメである。その作業はまるでベテランの電気屋さんのようだ。興味深々でその作業を見ていると突然、無線に早くもヒットコールが入った。「47 の・・・」??? なんとヒットポイントは福島県沖のようである。出港からまだ一時間半ほどの時間。いったい何時に出港したの？

フライングじゃないの？今日は南がいいの？・・・様々な憶測が頭を過る。しかしキャプテンは動じる事もなく目的海域に向かって進んでいった。

出港から 2 時間半ほどで目的海域付近に到着、ボートをスローにする。エンクロージャーをオープンにすると、いよいよ戦闘態勢である。気が付けば、海は貧栄養の吸込まれそうな紺碧の潮色。コスタリカあたりの太平洋か（行ったことはないが）エーゲ海（ここは行ったことがある）にでもいるかのような錯覚を覚える。水深はなんと 600m 超！少し恐怖さえ感じる（溺れたらプールでも一緒だが）。360° 水平線の海に他船は一艘も見えない。さっそくハイテク機器の反応を見るがイマイチ反応は薄い。全員でワッチしながら気配を探す。潮目、鳥、漂流物、もちろん魚。鳥山は立っていないものの海鳥は終始うろうろと巡回していて、雰囲気はある。

突然ボートの傍から、トビウオが飛ぶ。ペンペンシイラのジャンプも見えた。「この辺からやってみましょうか。」キャプテンの一声でクルーの方達が慌ただしくセッティングを始める。私はここまで本格的なトローリングは初体験なので、とりあえず作業を見守る。センターロング 1 本、ショート 2 本、左右のアウトリガー各 1 本を流す。ルアーが水面をスプラッシュ&ダイブするように、ボートとの距離を微妙に変えつつ、手際よく 5 本のタックルを流し終えた。ショートのルアーとボートとの距離はスクリュウの泡が消えるあたり、僅か 10m ほどである。より攻撃的な 150 kg 超の大型は特にこのショートに喰ってくる確率が高いとキャプテンは言う。この距離で、水面で・・・想像するだけでアドレナリン出まくりである。ボートはスロー（とは言ってもかなりの高速！こんなに速くて喰ってくるの？）でトロールする。

今日のターゲットはストライプドマーリン（マカジキ）、ブルーマーリン（クロカワカジキ）、稀に、より暖流系のブラックマーリン（シロカワカジキ）。特に 150 kg 超のクロカワをメインターゲットとしている。黒潮の分流が流れ込むこの時期、黒潮に乗ってやってくるこの魚達を狙う訳であるが、ここ金華山沖でのヒット率は日本有数の高確率。単純に考えれば黒潮の本流が流れる、より南の紀伊半島や四国沖といった海域のほうが確率が高いのではと思っていたが、数は少ないものの、はるばる此処までやってきた、より、やる気のある高活性の魚が多い為にヒット率は高いのだと言う。

慌ただしいセッティングに気を取られていたが、気が付けば目の前には（阿武隈川）程の潮目が現れていた。この様な変化に魚は付く。さすがキャプテン、良い潮目は素人が闇雲に走ったところでなかなか見つけられない。私も以前、一日中走り回っても見つけられなかった事を何度も経験している。特に大陸棚、海嶺等が絡まないこのエリアは底から湧きあがる潮流に乏しい為、決った場所に発生せず、日々変化していくため発見が難しいの

だと言う。水温の変化、風向、潮流を読み、パズルを解くかの様にゲームを組み立てていく。(海は広いな大きいな)なので、一匹もいない所には永遠と何もいないのである。いろいろな変化を検索、追求していく。

Sさんは6mはあろうかと思われるツナタワーをよじ登りワッチを開始(私はそこに行く勇氣は無かった)、私とSさんは右舷、左舷でそれぞれ(なにか)を探す。波高は1.5m程だがウネリは無くローリングしないので快適である。快晴の空。陽はだいぶ高くなった。

(阿武隈川)程の潮目の対岸あたりで、突然、カジキがジャンプする。(バタフライ)ではなく、ポーンと垂直に立ち上がったままの、シッポまで水面から躍り出たのウルトラCを2回。「2時！」の叫びと同時に、ボートはフルロットルで魚の飛んだ2時の方向に急行する。

カジキがジャンプした辺り、水面には無数の漂流物が現れ、もしかしたら宴の後だったのか、の雰囲気だけが漂っていた。キャプテンは(魚の匂い)がすることもある、と言う。この大海原で(あんたは犬か、はたまたシャークか、失礼)。緊張しながらこの辺りをトロールする。明らかに今までとは違う雰囲気。まだアタリは無い。ボートは潮目と平行に、横切ったり、大きく旋回したり、蛇行したりとアクションを付け、あらゆる手を尽くすも、いまだヒットは無い。

「ルアーの色が合わないのかなー。」「右のアウトリガーもう少し出して。」キャプテンからの細かい指示が飛ぶ。スクリューのすぐ先に、でっかい赤い、反射板の付いたティーザーを沈める。いろいろと手を尽くすが、やはりそう簡単にカジキは釣れないのである。

最初から釣れる気はしていなかったので(失礼)、久々のクルージングを満喫することにする。最初のビールは一匹釣ってから、と豪語していたキャプテンは、すでに2本目のビールをやっつけていた。今日の、何が良かった？天気がいいじゃないか！乾杯！

太陽が真上にきた頃、突然私の目の前、右舷のアウトリガーが弾き飛び、シャンパンゴールドのアルテクノスから、けたたましいクリック音と共にラインが出ていく。「ヒットー！」「うそー。」「本当に来ちゃったよー。」というのが正直な気持ち。素早くタックルを手に取り、ファイティングチェアに滑り込むSさん。私は急いで遊びタックルの回収にあたる。本当に現実？まだ夢を見ているようだ。

ファーストランは、以外にもプアーなものだった。(大型は一気に500mほど走るよ！)(いくら巻いても一向にラインを回収できないんだ！)(原チャリにライン付けて引つばら

れる感じ!)とか言う話を聞いていたので、やや拍子抜けするくらいスムーズにファイトする S さん。100mほど先で魚がテールウオークするのが見えた。(シイラ?)(ワフー?)。ジャンプしたのが遠い所だったのでビルが見えず、一瞬外道かとも思う。しかしジャンプする姿、独特のヒラヒラと空中を舞う姿、小型ではあるがやはり本命のようである。

僅か 5~6 分で船縁まで寄る。小型とはいえカジキ。このタイムで寄せられるのもキャプテンの操船技とアングラーの息が合っていることである。いよいよクライマックス。タグ&リリースだ。「操船お願い!」キャプテンから操船を任せられ、ビビる私。キャプテンはグローブをはめ、素手で魚のビルを掴む気らしい。見ているだけで(大変危険な)仕事なのである。

ダクロンの、ぶつとい縄の様なリーダーが見える。リーダーを掴むと、グルグルツと 3 回ほど手に巻きつける。(ここで魚に走られて海に落ちたらどうすんだろう)。「右!左!バック!スローで前進!」キャプテンの叫びにビビりながらも操船する私。タグを打ち、フックを外した魚を、ビルを掴んだまま低速前進して鰓に海水を通し、呼吸を整え、静かに紺碧の海へ放してあげた。40 kg 程の小型のマカジキであった。

ファイトタイムは僅か 8 分程。「渡辺さんと息が合えばもっと早かったのになー。」とキャプテンに皮肉を言われつつも、よかったよかった、バンザイである。もっと大型だったらと恐怖を感じつつも、結果オーライである。この釣り、1 人では難しい、チームプレーの釣りなのだ。

その後、タイムアップ 30 分前の 14 時、再びドラマが起きるが、残念ながら 15 kg 程のブルーシャーク。この日の釣りを終えることとなる。

今回、このような貴重な体験をさせて頂き、N キャプテンには大変感謝しております。ここは海外ではないかと錯覚する程、非日常的な世界を体験出来、また新しい思考が自分の中に生まれた気がします。また是非誘ってください! 2016 年 8 月



